精神分析世界——その核において伝えられるもの——

森　　真　一

一　はじめに

P・L・バーガーは、「精神分析の社会学的理解をめざして」と題する論文の冒頭で次のように述べている。「精神分析はアメリカのシーンの一部となっている。それは、世界の他の場所ではおそらく見られないような仕方で承認を受けている。このことは、たとえ精神分析という意味を狭義の意味、すなわち病院の内外で行われている心理療法の一形態という意味で用いる場合でも、ためらいなく主張できる。だが、狭義の精神分析は、より広範な現象の制度的核を構成しているにすぎない。この核の内部には精神分析指向の精神医学の高度に組織化された構造が存在し、病院、調査機関、養成機関、精神分析協会・・、さまざまな分野の臨床心理学がネットワークを形成している。・・・しかしながら精神分析をより広い意味に解するなら、つまり心理学でフロイトが行った革命に由来する一群の考えや活動という意味に解するなら、驚くほどの広さをもつ社会現象にアメリカ人は直面している。精神分析の制度的核を取り囲むようにして、曖昧ではあるがカウンセリングと心理検査の複合体 counselling and testing complex と呼ばれる衛星組織・活動の輪が存在する。・・・〔この〕複合体は・・・社会の全制施設組織の広範な領域に広がっている。その沈殿化が最も進んでいるのは（公的・私的）福祉組織、教育、人員管理の領域である。しかしこのように視野を広げてみても、アメリカで見られる現象を尽くしているわけではない。というのもわれわれは制度や組織だけを、あるいはそれらを最も重要なものとして、扱おうとしているわけではないからだ。より重要なのは、精神分析が一つの文化現象になってきていることである。すなわち、精神分析は、人間の性質を理解する方法となり、この理解を基礎にして経験に秩序を与えるものとなってきているのである」［Berger, P. L., 1965:48–49］。

このようにアメリカの現状を認識するバーガーは、精神分析が提供する心理学モデルのアメリカ社会への浸透やそのモデルの果たす社会的機能を、近代アメリカの産業化による生活の公的領域と私的領域への分離、その分離に起因するアイデンティティ危機、社会構造の不透明感等の点から知識社会学的に説明している。つまり、制度や知識としての精神分析がアメリカ社会に普及したプロセスやそれを支えた広範な社会的背景を明らかにしようとしたわけである。このような試みは、精神分析を理論的に用いることは数多いけれども「精神分析の社会学的な理解」の試みがまだまだ少ない現状[1]からみて、独自の意義を有していると言えるだろう。

本稿も大きくは「精神分析の社会学的理解をめざして」いるのだが、ここでは特に文化現象としての精神分析を「社会的世界」概念をもとに記述・分析することが目的である。冒頭に引用したバーガーの論稿は、いわば社会的世界としての精神分析世界発生の過程と背景の解明を狙ったものであった。それに対しわれわれは、理念型として

1）例えば、イギリスのエドワード・エルガー社出版の論文集シリーズ、『Schools of Thought in Sociology』の第一〇巻、『Psychoanalytic Sociology』（Ⅰ・Ⅱ）は六部から構成されているが、そのうち五部が精神分析理論の社会学的応用を試みた論文からなり、精神分析の社会学的分析を試みた論文は一つのパートを構成するのみである。それは収録された全論文三四本中、四本にしかすぎない。

の精神分析世界の記述・分析を目的とする。精神分析世界は、バーガーも指摘しているが「制度的核」のまわりを「カウンセリングと心理検査の複合体」が取り囲むといった具合に、層を成すようにして一つの「社会的世界」を構成している。けれども成層的な精神分析世界全体を包括的に記述・分析することは本稿の射程をはるかに越えるので、ここではその「制度的核」、なかでも精神分析家が構成する世界に焦点を当てて議論する。こうした対象を記述・分析するにあたって本稿が依拠するT・シブタニや片桐の「社会的世界」論の枠組みでは、パースペクティブの共有と、それを可能にするコミュニケーション・チャンネルが問題になるが、前者のパースペクティブについては、別稿［森、一九九四］で詳しく議論しているので、本稿では後者のコミュニケーション・チャンネルについて論じたい。とりわけ、コミュニケーション・チャンネルが当の精神分析家の世界にもたらした“意図せざる結果”と、“精神分析の本質として伝達・継承されるものは何か”を明らかにすることを中心的な課題としたい。

では、われわれが用いる「社会的世界」概念を説明し、その概念を用いて精神分析世界を類型的に記述することから議論を始めよう。

二　「社会的世界」概念と精神分析世界について

「社会的世界 social world」という用語は、すでにさまざまな理論的立場の人がさまざまな意味合いで用いているが、われわれはシンボリック相互作用論における「社会的世界」概念、特にT・シブタニ［Shibutani, T., 1955］と片桐［片桐、一九九一］のそれに依拠する。彼らの枠組みが精神分析世界を捉らえるに適しているとわれわれが判断するからであるが、その理由については後で述べよう。さて、彼らの「社会的世界」概念の第一のポイントは、「パースペクティブの共有」にある。つまり社会的世界とは「共通のパースペクティブをもつ限りにおいて成立する人々のまとまり」［片桐、同：六九］あるいは「『共通の関心の対象について思考し、行為し、話す方法としてのパースペクティブ』を共有し、その限りにおいて成立する人々のまとまり」［同：七〇］を指す。パースペクティブとは、「自らの世界についての整理された見方であり、さまざまな対象、出来事、人間性の属性について所与化された見方」［同：六九］のことである。

彼らが「パースペクティブの共有」に関心を向ける理由は次の点にある。それは、近代の大衆社会においては、「従来のコミュニティや成員性のはっきりした組織などが、かならずしも人々のパースペクティブの基準とはならず、人々のパースペクティブの対象が拡散する」［同：七三］という時代認識があるからである。言い換えると、「地理的な近さにもとづくコミュニティや、公式的な成員性にもとづく組織、家族などによって形成される第一次集団だけでは説明できない」人々の生活の場を捉らえるために、「それらに加えて、地域的限定や成員性の枠、対面的場を越えて、パースペクティブの共有によって成立する関係としての社会的世界」［同：六九－七〇］にシブタニ＝片桐は注目しようとしているのである。

この「パースペクティブの共有」は、ある特定の「コミュニケーションのチャンネル」への参加を通して構成される。これが第二のポイントである。シブタニは次のように言っている。「共通のパースペクティブ――共通の文化――は、共通のコミュニケーションのチャンネルへの参加を通して現れてくる」［Shibutani, T., ibid.: 565］。「それぞれの社会的世界は文化的領域であり、その境界は、地域性や形式上の集団成員性によってではなく、効果的なコミュニケーションの及ぶ範囲によって設定される。コミュニケーションのチャンネルにはさまざまなものがあり、安定性や広がりの程度もさまざまなので、社会的世界は、構成、規模、成員の地域的分布の点で多様である。・・・・とりわけ重要なのだが、社会的世界は静的な存在ではない；というのも、共有されたパースペクティブは絶えず再構成されているからだ。このように、それぞれの社会的世界はコミュニケーション・チャンネルの確立とともに誕生する；それゆえ、生活条件が変化し、社会関係も変化すれば、その社会的世界は消失することになるだろう」［ibid.: 566–567］。

このコミュニケーション・チャンネルのあり方

の違いから、シブタニは社会的世界を三つの類型にまとめている［Shibutani, ibid.: 566/1986: 109–110］。片桐はそれをさらに簡潔にまとめているのでそちらを引用する。「第一は、宗教的カルト、ゲイ・コミュニティなどの下位世界、少数民族などの『共同社会的構造（communal structure）』である。この社会的世界は、比較的に地理的に隔離されていることが多く、『秘密情報』や母国語の新聞などが内的な結びつきを強めている。第二は、演劇の世界、医学の世界などの『アソシエーション的構造』である。これらの社会的世界は、それぞれの地域の自発的集団の活動の結びつきや機関誌などによって維持されていることが多い。そして、第三の社会的世界は緩やかに結ばれた『関心の宇宙』であり、それにはスポーツの世界、切手収集家の世界、ファッションの世界などが含まれる」［片桐、同：七三－七四］。

ところで本稿の目的はシンボリック相互作用論における社会的世界論そのものの検討にあるわけではないので、その紹介はひとまずおく[2]。次に検討したいのは、精神分析世界を捉えるのにシブタニ＝片桐の「社会的世界」概念が有効であるとわれわれが考える理由であるが、それはまさに精神分析が、パースペクティブの共有とコミュニケーション・チャンネルの二点に照らして、一つの「社会的世界」を構成していると考えられるからである。以下、その理由を論証しよう。

まず第一に、パースペクティブの点であるが、精神分析は、固有のパースペクティブをもっている。精神分析は、神経症患者の症状だけでなく、夢や錯誤行為、冗談、芸術、神話その他の個人的・社会的現象を、特殊な解読作業を必要とするメッセージとみなす。それらの顕在的な意味の裏には、メッセージの送り手が“無意識”に発している別のメッセージが潜んでいるとの見方を採っているのである。その潜在的なメッセージを解読・解釈する作業がすなわち“精神分析”であり、そのメッセージを解読するためのコードは、“幼児期の親子関係”“愛情と敵意”から構成されるエディプス・コンプレクスの図式である[3]。神経症等の個人的・社会的現象を共通の考察対象とし、特有のコードにもとづいて解釈を加え、「無意識、抑圧、抵抗、転移」といった専門用語を用いて独自の言説の世界 universe of discourse を形成する精神分析は、「共通の関心の対象について思考し、行為し、話す方法としてのパースペクティブ」を有していると言えよう。

第二に、精神分析的パースペクティブを共有している人々のまとまりは、地域的境界や集団・組織への成員性が必ずしも明確ではない。この点を説明するために、先のシブタニの類型論を参考にする。ただし、精神分析世界は彼の類型のどれか一つに相当するというより、この三つの類型から構成されていると考えられる（しかし、彼の三つの類型あるいはバーガーの類型のそれぞれに正確に適合するとは限らない）。

1）精神分析家が構成する世界

バーガーが言うところの「制度的核」にほぼ相当する、病院に勤務する分析家や個人で開業している分析家が構成する社会的世界。彼らは、各地の精神分析協会から資格を得た教育分析家の教育分析にパスしてきた人々であり、厳密な意味で“精神分析家”を名乗ることができるのは彼らだけである。

2）精神分析家を取り巻く人々が構成する世界

分析家ではないが精神分析的アプローチをも採用する心理療法家、カウンセラー、精神科医、ソーシャル・ワーカー、ケース・ワーカー、教師らが構成する社会的世界である。バーガーが指摘した「病院、調査機関、臨床心理学」や「カウンセリングと心理検査の複合体」および「福祉組織、教育」に携わる人々の世界がほぼこれに相当する。

3）精神分析や各種の心理療法を実践したりこれらの知識を仕事に用いるわけではないが、精神分析理論・思想などに出版物その他のマス・メ

2）社会的世界論が登場してきた時代的社会的背景については片桐［一九九一］が、また社会的世界論の理論的な課題についてはA・ストラウス［Strauss, A., 1978］が詳しく論じている。

3）ただし、精神分析の一分派である「対象関係論 object relations theory」は、父親－母親－子供の三者関係からなるエディプス関係以上に、母親－子供の二者関係からなる前エディプス関係を重視する［Malcolm, J., 1981: 35］。それゆえこの分派では、患者のメッセージを解読するためのコードも前エディプス的な図式となる。

ディアを通じて接触したり、日々の生活において精神分析的解釈図式を「人間の性質を理解する方法」として用い、その理解に沿って「経験に秩序を与える」人々の構成する世界。精神分析世界の周縁部であり、シブタニの言う「関心の宇宙」にほぼ相当する。

これら三つの精神分析下位世界を“地域的境界や組織・集団への成員性”によって区切ることはできないであろうか。3）についてそれはほとんど無理であろう。では2）についてはどうであろうか。例えばカウンセラーや精神科医、教師らは、施設や病院、学校など特定の組織や集団に所属している。けれども彼らのパースペクティブは（程度はさまざまだが）精神分析的枠組みに準拠しており、自らが所属する集団のパースペクティブには部分的にしか準拠していない。それゆえ彼らは、フォーマルには所属集団・組織の世界を構成しているが、パースペクティブの点からみると所属集団・組織によっては区切ることのできない“社会的世界としての精神分析世界”の下位世界を構成していると考えられる。最後に1）についてはどうだろう。彼らは精神分析を専門の職業としている人々であり、国際精神分析協会や各国・都市にある精神分析協会などの組織・集団に所属している。その意味では、組織・集団への成員性は比較的明確である。しかし、これら個人開業の分析家や病院勤務の分析家たちは、昼間は自分たちのクリニックで治療活動を行い、夕方になると分析協会へ集まって教育分析やスーパーヴィジョンを受けたり、研究会を催すなどの活動を行っている［Malcolm, J., ibid. : 55］。このように精神分析家の世界も地域的境界や集団・組織への成員性が必ずしも明確ではなく、その記述・分析には社会的世界の枠組みが役立つと思われる。

第三に、精神分析的パースペクティブを共有する人々のまとまりは、固有のコミュニケーション・チャンネルによって構成されている。この点については、上記の三類型それぞれのコミュニケーション・チャンネルを論ずる余裕はないので、1）の精神分析家の世界に的を絞ることにする。イギリスの社会学者M・ラスティンは、精神分析家の構成する社会を一種の“秘密結社（secret society）”として記述しているのだが、彼の論稿を参考にしながら次章で、精神分析家世界を構成するコミュニケーション・チャンネルとその“意図せざる結果”について論じよう。

三　精神分析家社会の秘密結社的構成[4)]

M・ラスティンは、本稿のような社会的世界論の観点に立ってはいないものの、精神分析家の世界を構成するコミュニケーション・チャンネルの記述に役立つ議論を展開している。彼は“知識体系としての精神分析がいかに統制され、制度化されているか”を考えるために、イギリスにおける精神分析制度を二つの理念型に類型化する。一つは、正統派精神分析に属する精神分析協会、「英国精神分析協会 British Psychoanalytic Society」である。この制度は英国唯一の精神分析家養成機関であり、精神分析の本質 essence を有資格者にだけ伝達・継承させ、それによってその本質の純粋さを保持しようとする。もう一つは、伝道師的アプローチ Missionary Approach と彼が呼ぶ「タヴィストック・クリニック Tavistock Clinic」である。ここでは臨床・教育心理学者やソーシャル・ワーカー、児童心理療法家らの養成が行われ、分析家の養成には携わらないため教育分析はしないが、精神分析的な指向性をもつ。精神分析の洞察をできるだけ多くの場に“伝道”しようとするので、その本質の希釈化や“汚染”につながる可能性がある。ラスティンによる以上の理念型を前章のわれわれの分類に置き換えれば、前者は“精神分析家の世界”に、後者は“精神分析家を取り巻く人々が構成する世界”に相当するであろう。

われわれの課題は精神分析家のコミュニケーション・チャンネルの分析であるから、議論を前者の正統派精神分析の制度に限定するが、ラスティンはG・ジンメル［Simmel, G., 1950＝1979］の議論を引き合いに出して、前者には“秘密結社”的な性格が見られると言う。ではジンメルが提示した秘密結社の属性と精神分析制度とはどう対応

4）ラスティンもわれわれも、精神分析社会が“秘密結社”的だという主張に価値評価を含ませようとしているわけではない。

するのだろうか。ラスティンは次の九つの属性に対応関係を認めている［Rustin, M., 1985：102–103］（＜ジンメルが記述した秘密結社の属性＞＝関連する精神分析制度の属性）。

a＜沈黙のルール＞＝患者の情報について厳格な守秘主義 confidentiality。
b＜話し言葉によるコミュニケーションの選好＞＝精神分析（分析家養成のための教育分析とスーパーヴィジョンを含む）は話し言葉で行われる。
c＜秘密の共有による緊密な相互関係＞＝分析作業における守秘主義の慣行は、分析関係外の者とのコミュニケーションの可能性を限定する。それによって、分析者と被分析者との間には特別な絆が形成される。
d＜ヒエラルヒー＞＝正統的な形式の教育分析・スーパーヴィジョンは「構造的に不平等な」関係を要請する。
e＜儀礼＞＝寝椅子に横にならせることや分析状況の中立性などの分析技法は、安定した型通りのコンテクストの確立にとって儀礼的な作用をもつ。
f＜守秘主義によって確立される境界内部での自由＞＝治療状況において患者は自己を自由に露呈する。
g＜外界との相違を強く意識することから生じる高度に自意識的な生活様式＞＝精神分析以上に自意識的な下位文化は他に見当たらないであろう。
h＜当該集団の価値の中でも特別な本質 essence を継承してきた者による貴族制＞＝教育分析家と被分析者（訓練生）との関係は一種の“家系 lines of descent”を形成する。この“家系”を通じて分析の本質が伝承される。
i＜秘密結社加入に至るまでの段階的な通過儀礼＞＝精神分析治療を実践するには、教育分析とスーパーヴィジョンという長期に亘る社会化を経なければならない。それは、志願者の能力と素質に関する（教育分析家の）個人的な判断によって統制されるので、教育分析家は高度の自律性を有することになる。

ラスティンがあげる以上の属性の中でコミュニケーション・チャンネルに関するものは、“患者－分析家間のチャンネル”と“分析家同士（特に教育分析家と彼の分析を受ける訓練生）の間のチャンネル”とに区別できる。むろん、われわれの課題にとっては後者が重要なのだが前者からみておこう。

（1） 患者－分析家間のチャンネル

ここでとりわけ重要なのは、患者に関する情報の守秘である。その理由は以下のような正統派精神分析の治療関係の特徴に求められる。

精神分析は、患者が自由連想法にしたがって語った話の内容から患者の抑圧された無意識を解釈し、その解釈を通じて患者本人に無意識を意識化させることで神経症の治療を図る心理療法である。それゆえ、患者が治療の基本原則である自由連想にしたがって、恥ずかしいとか取るに足らないと思えること、秘密にしておきたいこともすべて分析家に話すことが精神分析治療の成否を握る鍵となる。それらが可能となるには、患者－分析家の間に親密な信頼関係が必要となってくる。だが一方で治療関係は、決められた時間に週何回分析を受けて料金はいくらというふうに契約関係でもある。つまり、親密さとは対極にあるような契約関係の枠組みのなかで、親密な信頼関係を成立させなければならない。その上、親密な信頼関係は、日常生活では対面的な状況での相互の秘密の開示に基づくのだが、分析治療状況は対面的状況でありながら患者の一方的な秘密情報の開示を基礎としている[5]。このような状況で患者との信頼関係を築くには、患者が語った話の内容を外部に漏らさないことが必要条件となる。つまり、患者に関する情報の守秘が分析治療活動を成り立たせているわけである[6]。

（2）分析家間のチャンネル

5）E・ゴフマンが言うところの「信託された秘密 entrusted secrets」に当たるだろう［Goffman, E., 1959：143＝1974:167］。
6）治療関係において守秘されるのは患者の秘密情報だけではない。分析家個人に関わる情報も守秘されるのである。以下、簡単にその理由を述べよう。精神分析家は、患者が分析家に対して示す態度・振舞いを、患者が幼児の頃、親に抱いた無意識的空想を分析家へ“転移”させた結果の反応だとみなす。この仮定に基づいて、分析家は自分に対する患者の態度・振舞いを分析・解釈し、症状の無意識的原因を突き止めようとする。この

次に分析家同士の間のチャンネルであるが、ここでは教育分析とスーパーヴィジョンのチャンネルが問題になる。だがとりわけ重要なのが前者、すなわち教育分析家とその分析を受ける訓練生の間のチャンネルである。

教育分析は元来、これから分析治療を実践しようとする分析家志願者が自ら分析治療を受けることで、a 精神分析理論の“真理”を自分自身で経験し、b 将来の治療実践の妨げとなる自分の神経症的傾向を克服することを意図して始められた。だが教育分析は、志願者が分析家の資格を得るときにだけ受けなければならないものではない。分析家となってからも定期的に教育分析を受けなければならない。なぜなら、理論上、人は自らの無意識を完全に意識化することはできないので、分析家の資格を得た後も定期的に教育分析家の分析を受けて絶えず自己の無意識を意識化する努力を続けなければならないからである。つまり、分析家は一方で日々分析治療を実践しながら、他方自らも分析を受け続けるわけである。

しかしラスティンによれば、教育分析（およびスーパーヴィジョン）は、上記の意図とは異なるいくつかの帰結をもたらしている。

まず、「精神分析的理解の本質が原則としてパーソナルな分析（教育分析；引用者）を通して継承されるという事実が、精神分析運動創始者たちに端を発する極めて閉鎖的な系統 filiation あるいは“家系”を確立している」[Rustin, M., ibid. : 105]。教育分析を行うことができるのは、分析家のなかでもごく限られた年長の人々であり、分析家志望者の採否はこの教育分析家たちの個人的・経験的な判断に任されている。しかも“家系”の一員であることが分析家の世界では地位の重要な指標となっているため、精神分析社会は“貴族制”の側面をもつに至っている。選ばれた者だけが分析家になることができ、さらにその中から選ばれた者が教育分析家となって精神分析社会への新加入者を統制するのである。また、教育分析家とその分析を受けて分析家となった者との間には構造的に不平等な関係がその後も維持されるので、厳格なヒエラルヒーをもたらしている。このような精神分析社会の閉鎖性は、分析的知識や実践の本質や純粋さの維持・伝達に寄与しているが、同時にその本質の広範な普及を妨げる結果ともなっているのである。

以上のような構造的側面には情動的な問題が付随している。先にも触れたが、精神分析治療は、患者が自己をさらけ出すことができるような親密な関係をフォーマルで契約的な状況において築くという、特殊なコンテクストで行われる。教育分析も基本的に同じコンテクストで実施される。ここから次のような結果が生じる。分析家は専門家・職業人としての技術習得のために教育分析やスーパーヴィジョンを受ける（フォーマルで契約的な側面）のだが、その結果として教育分析家やスーパーヴァイザーへの人格的・個人的愛着や忠誠心が形成される（親密さの側面）。ここから、精神分析制度内の公的生活が成員のプリミティヴな情動の侵犯を受けるという問題が生じてくるのである [ibid. : 91][7]。その上、患者の紹介システム

“転移”は、精神分析治療において自由連想以上に重要な位置を占める。なぜならS・フロイトが言っているように、“転移”を克服することが「治療の目標であるもとの病気を除去することであり、われわれの治療上の課題を解決すること」[1916–1917 : 463＝367] と考えられるからである。そうなると分析家にとって“転移”を成立させることが治療の成否を握ることになる（だから“転移”関係を形成できない分裂病や自閉症は分析治療の対象から外されることが多い）。

症状が治癒したある患者は、分析治療を終えるため分析家に最後のあいさつをした後に次のようにつぶやいている。「大した男だ！最後まで仮面を脱ごうとしない」[Cardinal, M., 1975＝1983 : 328]。このつぶやきには、分析家の個人的情報が首尾よく統制された事実がよく表現されている。

7）ラスティンはこの問題について具体的な例をあげていないので、例をあげて考えたい。精神分析においては「患者優先か、科学が優先か」という歴史的な論争がある [Malcolm, J., ibid. : 140]。患者を症状の苦しみから救うには正統派の科学的分析方法を踏み外してもかまわないという“患者優先派”と、科学的分析方法を維持してこその“精神分析”なのであると主張する“科学優先派”との間で、精神分析運動初期から論争が続いているのである。前者はS・フェレンツィに、後者はS・フロイトに端を発し、現在ではD・W・ウィニコットら“前衛派”と呼ばれる対象関係論が前者の、フロイト派が後者の“家系”の継承者として論争を続けている。だが、後で本文でも触れるが、実際に治療状況で行っていることはほとんど同じなのである。にもかかわらず論争は続いている。おそらくこの論争を支えているのは、自己の属する“家系”への個人的愛着や忠誠心等の情動的要因であろう。

referral system が教育分析の資格をもつ年長者や地位のある者を中心にネットワーク化されているため、若い分析家たちは彼ら年長者への依存度を強める結果となっているのである。

第三に、治療者－患者関係から外へ漏れないはずの患者の秘密情報が、教育分析とスーパーヴィジョンを通じて漏れる可能性がある。既に述べたが、分析家は分析家の資格を得た後も定期的に教育分析家の分析を受けなければならない。教育分析を受ける分析家は教育分析の場面では患者の役割を演じるのであるから、患者が従わなければならない自由連想の原則に分析家自身も従い、思いつくことはすべて教育分析家へ話さなければならない。このとき、分析家は守秘しなければならない患者の情報を連想の中に漏らしてしまう可能性が出てくるのである。スーパーヴィジョンにも同じことが言える。分析家は、自分が担当する患者がどういう症状を訴えているのか、それをどう診断しどういう治療を施しているのかについてスーパーヴァイザーに報告し、指導を仰ぐのだが、その際患者の秘密情報がスーパーヴァイザーに漏れる可能性があるのである。

教育分析やスーパーヴィジョンは、以上のような非意図的な構造的・情動的帰結をもたらした。これらの特徴や守秘主義をもとにラスティンは、精神分析社会に“秘密結社”的な性格を見いだしたわけである。ただしここで注意する必要があるのは、彼の主張において“秘密”と呼ばれる情報は、患者個人に関する秘密情報であり、個々の治療関係内で分析家と患者に共有される情報である。逆に言えば、分析家相互がある情報を“秘密”として共有しているがゆえに精神分析社会が“秘密結社”的だというわけではないのである。もちろんさきに指摘したように、教育分析家と分析家の間で患者の秘密が共有されることはある。だが患者の秘密が分析家の間で共有されることによって、精神分析社会は“秘密結社”的になっているのではない。事態は反対であって、分析社会を“秘密結社”的社会へと構成する教育分析やスーパーヴィジョンのコミュニケーション・チャンネルによって、結果として、患者の秘密が分析家間で共有されるわけである。このように、何らかの秘密が分析家の間で共有されている事実を指摘することなしに、精神分析社会を“秘密結社”的と呼べるのだろうか。ラスティンは、“秘密結社”の不変のルールは、成員間の秘密の共有にではなく、ある知識が組織外部へ伝達されないことにあると主張する［ibid.: 96–97］。つまり、患者に関する情報の外部への伝達・漏洩に対し厳格な制限・統制が加えられているという点で、分析社会は“秘密結社”的だというわけである。

われわれは、精神分析家の世界が“秘密結社”であるのかどうかの判断を下したいわけではないが、ラスティンの主張には少々疑問を感じる。例えば、精神分析社会がもつ秘密結社的属性についてラスティンがあげた九つの項目のうち＜儀礼＞についてであるが、ジンメルは秘密結社において儀礼がもつ機能を“個々人の全体への統一・結合”機能に求めている。つまり「祭式の象徴的意義は、確実には限定されていない広範な感情を、悟性的なすべての個々の関心をこえてひきおこすのであり、このことによって秘密結社は、その個々の関心を個人の要求全体のなかへ織り込むのである。秘密結社の特別な目的は儀礼的な形式によって、社会学的であるとともにまた主観的でもある封鎖された統一体と全体性へと拡大される」［Simmel, G., 1950 : 360＝1979 : 94–95］のであると。それに対しラスティンは、分析治療において患者を寝椅子に横にならせることや分析家が中立性を守ることを一種の儀礼とみなし、治療状況に安定した型通りのコンテクストを確立する機能をもつとしか述べていない。なるほど秘密結社と精神分析の治療状況では儀礼が共通の属性ではあるが、それぞれにおいて全く異なる機能を果たしている。しかし、ジンメルは「このこと（儀礼が個々の成員を全体へと統合すること；引用者）は秘密結社の本質的な特徴のひとつをなしている」［ibid.: 360＝94］と言っているだけに、両者の機能上の差異は意外に大きいのではなかろうか。

さらにジンメルは、秘密結社にとっては儀礼自体も一つの重要な秘密なのだと主張している。「あたかも儀礼の暴露が結社の目的と行為、あるいは結社の存在一般の暴露とまったく同じように危険であるかのようである。・・・秘密結社は、それが鋭く強調する目的内容のまわりに、ちょうど心のまわりの身体のように、儀礼拘泥をうちた

て、両者をいわば秘密の庇護のもとにおくのである。なぜなら、このようにしてはじめてそれは調和的な全体となり、そこではある部分が他の部分を支持するようになるからである」[ibid.:359＝93–94]。けれども、分析治療における儀礼的要素としてラスティンがあげる属性は、文献等を通じて外部に知られており、暴露されると結社の存在が危ぶまれるような秘密というわけではないのである。以上のように、秘密結社と精神分析組織において儀礼の果たす機能や儀礼の秘密としての位置づけの点に隔たりがあることからも、精神分析社会は秘密結社であるというラスティンの主張には疑問が残る[8)]。

そのような疑問は別として、教育分析やスーパーヴィジョンという精神分析的パースペクティブを伝達するコミュニケーション・チャンネルが、構造的・情動的帰結を精神分析世界にもたらしていることを明らかにした点で、ラスティンの論稿はわれわれにとって非常に参考になる。けれどももう一点、教育分析やスーパーヴィジョンのチャンネルを通じて伝えられるものは何か、という問題が残っている。ラスティンは「精神分析の本質 the essence of psychoanalysis」あるいは「分析的理解の本質 the essence of analytic understanding」がこのチャンネルを通して伝達・継承されると言うのだが、これらの意味するところは必ずしも明確ではないからである。次章でこの問題を扱うこととしよう。

四　教育分析を通じて継承されるもの

繰返しになるが、教育分析は精神分析理論の“真理・正しさ”を自分自身で経験して、分析家自身の神経症的傾向を克服することを意図して始められた。換言するとその意図は、教育分析を受ける者が自分の夢や連想、教育分析家への自分の感情・態度を精神分析的枠組みにそって解釈できるように社会化することである。その意味で、教育分析のチャンネルを通じて伝達が意図される対象・内容は精神分析的パースペクティブであり、結果としてもすべての分析家がこのパースペクティブを身につける。これが伝達・継承・共有されるからこそ、精神分析家の世界は構成・再構成を繰り返すことができるのである。けれども、パースペクティブの伝達は、教育分析以外のチャンネル、例えば出版物等のチャンネルを通じても可能であり、精神分析家でなくとも身につけることができる。なぜなら、パースペクティブを伝達する行為（教育分析）とそれが伝達しようとする内容（パースペクティブ）とは切り離して考えることができるからである。ラスティンの論稿全体から受ける印象では、彼はこのパースペクティブを「精神分析の本質」と呼んでいるようである。けれども、原理的には今述べたように教育分析を経験しなくとも精神分析的パースペクティブの取得は可能なのであり、それは「本質」と呼ぶには値しないのではなかろうか。

8）歴史的に見ると、フロイトとそれを取り巻く人々は自分たちの集まりに秘密結社的な性格をもたせようとしていた。精神分析というパースペクティブを一人で培ってきたフロイトの周りには、二〇世紀初頭からその賛同者が集まり始め、一九〇八年には第一回国際精神分析学大会が開催された。しかしその後間もなく、彼が信頼を寄せていたA・アドラーやC・G・ユングがフロイトと袂を分かつに至った。

この事件に失望したE・ジョーンズは、一九一二年七月、「フロイトを守る一種の『親衛隊』のような風に、信頼できる分析者が小さなグループを作ったらどうかと提案した。・・・我々の間には遂行すべき義務はただ一つだけあることになるであろう。もし誰にせよ我々の一人が、精神分析理論の根本的な提唱、たとえば抑圧、無意識、幼児性慾などの概念を棄てたいと願うようなことがおこれば、まず我々と共にその見解を検討することなしには公にそれを発表しないと誓うことであった」[Jones, E., 1953 : 327＝1969 : 327]。ジョーンズによると彼のこの考えは、子供のころに聞いた“シャルルマーニュ大帝の十二勇士の物語り”や文学に出てくる多くの“秘密結社”の話に由来したらしい。ジョーンズのこの提案にフロイトは、「ただちに私の想像力をとらえたのは、・・・我々の仲間のうちもっとも優れた、またもっとも信頼できる者からなる秘密会を作るというあなたのお考えです」と手紙を書き送った [ibid. : 327–328＝327]。P・ゲイも同じく、この時フロイトがこの委員会の存在と活動については絶対に“秘密”にしなければならないことを第一の必要条項とした、と指摘している[Gay, P., 1988 : 230]。この“委員会”は一九一三年に発足、以後「少なくとも十年の間完全にその機能を果たし・・・その後、内部に困難がおこって、多少その機能がそこなわれた」[Jones, E., ibid. : 333–334＝334]。

「若い認識、宗教、道徳、党派は、しばしばなお弱く、したがって庇護を必要とし、それゆえに隠れるのである」[Simmel, G., ibid. : 347＝71、強調原著者] とジンメルは言っているが、この言葉はまさに精神分析運動初期の“委員会”の形成に当てはまるであろう。

それではわれわれが考える「精神分析の本質」とは何か。それは、分析家が非意図的に実践している特殊なコミュニケーションの形式を指す[9]。この側面はまさに教育分析を通してしか伝達できず、教育分析と切り離して考えることはできないのである。

基本的に教育分析で行われる分析作業は神経症患者に対して行われる分析治療と同じであるが、では両者で見られるコミュニケーション形式はいかなる点で特殊だと言いうるのか、その点を説明しよう。教育分析や分析治療の状況では、分析者は被分析者の夢や連想の報告、分析者に対する態度・振舞いを解釈の必要な“無意識からのメッセージ”とみなす。これは、精神分析的パースペクティブの基本である。ゆえに、分析者本人に直接向けられた被分析者のメッセージでさえも、額面通りには受け取られない。それさえも、被分析者が分析者へ“転移”させた、幼児期に表現されなかった親へのメッセージとみなされる。このような被分析者からのメッセージに対する分析者の対応は、次の三つの類型に区別できる。例えば被分析者が分析者を感情的に罵倒したとしても「今の私への悪口は『転移』といって、あなたが両親に向けていた感情が私に向け変えられたものです」と“解釈”するか、「今の私への悪口について、あなたはどんなことを連想しますか」と“連想の要求”をするか、あるいは“沈黙・無反応”を守るかのいずれかである[10]。言い換えると、分析者は被分析者との関係に感情的に巻き込まれることを回避し、被分析者との間に距離を保ち、何をなすべきかについて一切指示を与えないようにする[11]。このように分析状況というフレーム内で分析者は、被分析者の反応やメッセージを字義どおりには受け取らず、それらの内容に直接には答えない。また、被分析者との関係に巻き込まれれないよう、常にその関係を対象化・客観化しようとする。しかし、一方で被分析者にはこの関係に信頼をおくことを要求し、思いついたことはすべて自由に話すことを義務づける。つまり、分析者は親密な関係を築くことと距離をおいた関係を築くことを同時に達成するようなコミュニケーションを行っているのである。この種のコミュニケーション形式を分析者が一貫して崩さないところに、分析状況の特殊性があるのである。

このようなコミュニケーションのあり方を「精神分析の本質」と考える理由は次の二つである。一つには、それこそが精神分析治療の神経症に対する治療効果を生み出していると考えられるからである。詳細は別稿［森、一九九三］を参照していただくしかないが、その説明を要約すると、a神経症患者は、他者との相互依存的で悪循環的なコミュニケーションのループに囚われている、bそのコミュニケーションのあり方がパラドキシカルである、c問題を解決しようとするパラドキシカルなコミュニケーション自体が当の問題を悪循環的に維持・再生産している、d精神分析治療は患者の自己理解あるいは洞察の促進を意図してなされるが、実際には精神分析状況でのパラドキシカルなコミュニケーションのあり方が、問題を悪循環的に維持・再生産していた患者のパラドキシカルなコミュニケーションのあり方を変化させる、のである。以上のように、精神分析が神経症治療にもつ効果の源泉を分析家のコミュニケーションの形式に帰属するわれわれは、この側面こそ「本質」だと考えるわけである。

もう一つの理由は、精神分析は理論的にはさまざまな分派があり、神経症の病因や治療理論、症例の解釈を巡って論争が絶えないにもかかわらず、実際に治療状況で行うこと、つまりさきに類型化したような特殊な形式をもつコミュニケーションの方法は、分派間で共通しているからである。まさにJ・マルコムが指摘しているとおり、「さまざまな学派の分析家を分かつ差異は、彼らが何を行うのかあるいは行わないのかという点に

9）スーパーヴィジョンでは、それを受ける分析家の症例報告にもとづいて治療や解釈方法の指導が行われることは既に述べたとおりだが、そこでのコミュニケーションのあり方は教育分析におけるような特殊性が見られないので、教育分析に話を限定する。

10）E・ジョングは小説の主人公に「どうして分析医はいつも質問に質問で答えるのか？」［Jong, E., 1973＝1976：14］と言わせているが、この“質問に質問で答える”という方法も分析家が患者に対してとる典型的なコミュニケーション形式の1つである。

11）これらは分析者が守るべき「中立性 neutrality」と呼ばれている。

あるのではない・・・患者がしゃべったことや行ったことをどうみなし解釈するかという点にあるのである」[Malcolm, J., ibid. : 144]。

このコミュニケーション形式の伝達は教育分析家によって言葉で明示的になされるのではない。明示的には例えば「君の今の振舞いは、父親への愛情が私に“転移”したものだ」というふうに、分析的パースペクティブが言葉で示される。それに対しコミュニケーション形式は、「こういうふうにコミュニケーションしなさい」と言葉によって表現されるのではなく、教育分析家のコミュニケーションのあり方そのものに表現されているのである。それゆえコミュニケーション形式の伝達は教育分析と切り離せず、教育分析という対面的なチャンネルを通じてしかなしえない。伝達のパフォーマンス自体が伝達される内容そのものだからである。このような、伝達の行為自体がその行為の伝達しようとする内容そのものでもある例は、次の小話によく表現されている。「ポーランド人とユダヤ人が汽車の席に座っている。ポーランド人は少し前からいらいらと落ちつかない様子だ。何か悩みごとがあるのだ。ついに彼は我慢できなくなって口を開き、ユダヤ人にこうたずねる。『君らユダヤ人が、どうやって人から有り金すべてを巻きあげ、富を築くか、教えてくれよ』。ユダヤ人はこたえていう。『もちろん教えてあげるとも。でも、ただではだめだ。五ズロティよこしなさい』。金を受けとると、ユダヤ人は話しはじめる。『死んだ魚を手に入れ、頭を切り落とし、腹わたを水の入った器にぶちまけなさい。満月のとき、その器を墓場に埋めるのだ・・・・』。『それで』と、ポーランド人はせき込んでたずねる、『それを全部やったら、金持ちになれるんだな？』。『あわてなさんな』とユダヤ人はこたえる、『まだ話は終わっていないぞ。つづきを教えてほしければ、もう五ズロティよこしなさい！』。ふたたび金を受けとり、話を再開したかと思うとすぐにまたユダヤ人は金を要求する。そのくりかえしで、ついにポーランド人は怒りはじめた。『ケチくさい奴め。おまえが何を企んでいるか、気づかないとでも思っているのか？秘密などありゃしない。たんに俺から有り金すべてを巻きあげる魂胆だな！』。ユダヤ人は平然とこたえる。『結構、ついに分かりましたね、どうやってユダヤ人が・・・・・・』」[ジジェク、S., 1988＝1993 : 199][12]。

さらに、このコミュニケーションの方法を身につけるには実際に分析を受けてみる以外にない理由として、「精神分析の理論については膨大な文献があるけれども、治療室で実際におこっている事柄を記述したものは決定的に欠けている」[Haley, J., 1963 : 69＝1986 : 91] 点があげられよう。それに対しては、「いや、症例研究では分析状況での患者の連想や振舞いに関する詳細なデータが報告されているではないか」と反論があるかもしれない。しかしそれらのデータにはすでに分析者の解釈が加えられており、やはり「治療室で実際におこっている事柄を記述したものは決定的に欠けている」のである。それゆえ、分析者が実際に行っているコミュニケーション方法を文献を通して身につけることは難しく、その取得ルートは教育分析というコミュニケーション・チャンネルに制限されるわけである。

五　おわりに

以上、教育分析というコミュニケーション・チャンネルを通じて精神分析家の間に伝達・継承される「精神分析の本質」とは、分析家のコミュニケーションの形式であること、この「本質」はパースペクティブの伝達とは違って、教育分析のチャンネルを通じてしか伝達・継承されないこと、について論じてきた。もしわれわれが「精神分析家の世界は“秘密結社”である」と主張するとしたら、そこにはやはり分析家に共有される“秘密”があって、この特殊なコミュニケーションの形式こそがその“秘密”であるということになろう。

最後に、本稿は精神分析家の世界を社会的世界論の枠組みで、特にそのコミュニケーション・

12）ジジェクはこの小話を、精神分析治療における転移関係を説明するために用いているのだが、われわれはある情報の伝達行為がその情報の内容そのものであるような行為の分かりやすい例として引用したに過ぎない。

チャンネルに限定して論じてきた。むろん、同じ対象を他のアプローチを用いて分析・説明することもできたであろう。例えば、教育分析による新加入者の統制は、精神分析という職業の独占やサーヴィスの希少性、職業的価値や分析世界内での威信の維持に寄与しており、物質的・経済的基盤から説明可能であり、有益でもあろう。けれども、ラスティンが主張するように（われわれはこの点では彼と意見を同じくする）、「知識の制度化は自律的な—あるいは相対的に自律的な—機能であり、経済的なものに還元できない規範や帰結をともなうのである」[Rustin, M., ibid.: 106]。いわば本稿は、知識概念をパースペクティブの概念に置き換え、その共有・継承を可能にするコミュニケーション・チャンネルを軸に、精神分析家世界がもつ自律性やそれがもたらした規範・帰結を明らかにしようとしたわけである。

参考・引用文献

Berger, P. L., 1965, "Toward a Sociological Understanding of Psychoanalysis", *Facing up to Modernity,* Penguin Books, 1979

Cardinal, M., 1975, *Les Mots pour le dire,* Edition Grasset et Fasquell＝1983、柴田都志子訳、『血と言葉　被精神分析者の手記』、リブロポート

Freud, S., 1916–17, *Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse, Sigmund Freud Gesammelte Werke,* XI＝「精神分析入門」、『フロイト著作集』1:7–383

Gay, P., 1988, *Freud:A Life of Our Time,* Anchor Books, 1989

Goffman, E., 1959, *The Presentation of Self in Everyday Life,* Pelican books, 1971＝1974　石黒毅訳、『行為と演技』、誠信書房

Haley, J., 1963, *Strategies of Psychotherapy,* Grune & Stratton Inc.＝1986　高石昇訳、『戦略的心理療法』、黎明書房

Jones, E., 1953, *The Life and Work of Sigmund Freud,* edited and abridged by L. Trilling & S.Marcus, Basic Books, 1961＝1969　竹友・藤井訳、『フロイトの生涯』、紀伊国屋書店

Jong, E., 1973, *Fear of Flying* ＝1976、柳瀬尚紀訳、『飛ぶのが怖い』、新潮文庫

片桐雅隆、一九九一、『変容する日常世界』、世界思想社

Malcolm, J., 1981, *Psychoanalysis:The Impossible Profession,* Vintage

森　真一、一九九三、「精神分析治療におけるコミュニケーションと現実構成」、『ソシオロジ』、第118号

————、一九九四、「社会的世界としての精神分析世界—そのパースペクティブをめぐる考察—」、『社会学評論』第45巻2号(178)掲載予定

Rustin, M., 1985, "The Social Organization of Secret: Towards a Sociology of Psychoanalysis", *The Good Society and The Inner World,* Verso, 1991

Shibutani, T., 1955, "Reference Groups as Perspectives", *American Journal of Sociology,* VOL. 60, N. 6:562–569

————, 1986, *Social Processes,* University of California Press

Simmel, G., 1950, *The Sociology of Georg Simmel,* trans. by K.H. Wolff, The Free Press＝1979　居安正訳、『秘密の社会学』、世界思想社

Strauss, A., 1978, "A Social World Perspective", *Studies in Symbolic Interaction,* VOL. 1:119–128

ジジェク、S. 1988　守永直幹訳、「ヘーゲル、最も崇高なヒステリー患者」、『現代思想』1993年7月臨時増刊：199–215